

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800740		
法人名	潤幸会		
事業所名	ひまわり		
所在地	熊本県上益城郡山都町下市59番地		
自己評価作成日	令和5年3月7日	評価結果市町村受理日	令和5年5月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和5年3月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域の行事が再開され、久しぶりに祭りの見学を行い地元の方との触れ合いが出来てます。コロナ過の中人混みを避け、地域の催しを見にいつたり花見や紅葉狩りなど季節を感じる行事を計画しています。また家族との連絡を密に月1回生活の様子を手紙にて知らせています。職員も地元出身で話題を利用者様に提供しています。地元ならではの会話にて季節を楽しんでいます。笑い声が絶えない施設です。又、山都町一人の住民としての生活を楽しまれています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍以前は熊本県内外からも多くの見物客が訪れていた地元の祭り「八朔祭り」が今年度は復活し、町中を練り歩く造り物を入居者はホームの前に座り、拍手を送る事が出来ている。入居者にとって歴史あるこの祭りは馴染みそのものであり、その時間は何より嬉しいひと時であったと思われる。ホームに限らず職員不足は課題ではあるが、法人からの夜勤体制への人員配置や出勤日以外でも外出支援をサポートしようと応援に駆け付けるなど職員のチームワークが日常の支援に活かされている。管理者はコロナ禍で活用が難しかったギャラリーを地域交流の場として、新たな企画を検討していきたいとしており、職員や運営推進会議での意見を収集し、実現に至る事が期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	潤幸会の理念をもとにひまわりの理念を作っている。年度末に個人の目標を集計して次年度の目標づくりを共有している。	現在理念を見直し変更する方向で検討中である。話し合いをする中で入居者が加わり、「笑顔」だけは入れてね」と提案されると他の入居者から賛同の声があがるなど、普段の関係性が窺える。年度目標も毎年立てており、職員のケア規範として日々の支援に反映させている。	入居者の意向が入った理念が最終的にまとまれば、新年度の運営推進会議で地域や家族に向けて、紹介されることが期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	八朔祭りの再開で見学中に地域の方の声掛けあり。少しずつまた地域とのつながりが出来ている。菊花展や地域の方の文化展を見に行ったりしている。	八朔祭りは町を象徴する祭りであり、数年ぶりの開催に入居者が喜ばれている。外出の際は行は徒歩、帰りは車いすといった具合に疲れられるものの、地域へ出る機会を心待ちにされている。通りに面するホームでは人々と顔を合わせれば挨拶を交わし、交流しながら生活している。	以前ホーム前の商店から避難訓練時の見守りなどの協力があっており、感染症終息後に向けて新たに協力を依頼するなどの取組が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進委員会が開かれてない状態である。町の保健だよりや山都だよりをもとに話したり入居者様に見てもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営委員さん宅を、2ヶ月に1回訪問して街の話の情報を聞いたり、ホームでの状況の報告をしたりして情報を提供をおこなっている。サービスの向上を目指すようにしている。	運営推進会議は直接開催が出来ないことで、2か月ごとの行事などを書面で、他は口頭にて伝えている。行政や地域代表者には直接手渡しし、家族へは郵送にてホームの現状を報告している。管理者は手渡しの際に地域情報を収集し、ホームへの意見や要望を求めている。	新年度からの直接開催に向け準備を進めている。久しぶりの再開であり、改めて推進会議の意義について紹介したり、初回はホーム内を見学してもらい入居者の生活の様子を確認されることも良いと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進委員会の参加をお願いし、現在は活動のみの報告ですが、アドバイスをもっている相談できる関係である。	行政へは運営推進会議の資料を直接届け、入居者の現状を伝えながら意見をもらうように投げかけている。成年後見人制度について相談に応じてもらいながら、適切な助言をもらい、認定調査は事務所内で職員が立ち会い、入居者のありのままを伝えるようにしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員カンファレンスに置いてスピーチロックの研修を行ったりしている。拘束の行為を見たらその都度注意を行っている。	身体拘束の勉強会をホーム内で行い、法人の院内教育にも参加している。法人研修は直接開催を新年度移行としており、現在はDVDでの研修後に感想文を提出することとしている。ホームでは特にスピーチロックについて意見を出し合い、入居者に馴染みである方言(矢部弁)は、時にきつく聞こえてしまうとして語尾のトーンや言い方を変える必要があるとしている。	センサーマットや人感センサーを使わず、職員の観察力で対応している。今後は運営推進会議の中で、身体拘束についてホームの現状や研修の状況を報告し、情報発信していただきたい。令和6年度より開始される虐待防止委員会の措置期間として、本年度は準備に着手されることが期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	院内教育にて、DVDを見て意見交換を行っている。またグループホーム協会で学んだことは、カンファレンスの時職員に報告する。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用する方がいて、役場を通じて職員も学ぶことが出来た。日常生活自立支援制度との違いも同時に学ぶ機会になった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に家族、利用者様に説明を行い、その後質問の機会を持つようしている。改正があった場合は、法人より手紙で知らせている、		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を玄関に設置しているが、入れられることなく、直接管理者や担当職員に言われることが多い。意見はミニカンファレンスで話し合い運営に反映させている。	家族は意見や要望を直接話されており、入居者についての相談事や依頼が最も多いようである。担当職員が直近の入居者の様子を写真と文章で家族に送付して、安心してもらうように努めている。体調を崩し入院された方の「ホームに帰りたい」との強い希望に、2週間ほどを馴染みのホームで過ごされ再び病院に帰られた例など、法人医療機関と連携し入居者の思いに応えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	カンファレンスを行い、意見を出しやすい環境を行っている。個人面談を行い、相談出来る関係を行っている。	管理者は普段から職員の意見を聞き取り、必要によっては法人に声をあげており、個人面談なども行われている。希望休や有休取得に出来る限り応じ、全員で外出する際には休日の職員も応援に訪れるなど協力が得られている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	それぞれの能力に応じて職員は、利用者様の担当や係を決めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内は、院内研修にて感想・意見を書いてもらっている。外部の研修は、職員や管理者はオンライン中心に学んだ後を、他の職員へ伝えている。、、		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が、同業者と交流を行い何時でも相談できる関係を行っている。コロナが終息したら、施設見学の要望職員から出ている。得た情報は、職員に伝えるようにしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入院や退居される方には、情報や職員から聞き情報の共有を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申し込みの段階から、介護の心配や要望について聴くようにしている。入居後もいつでも相談を受ける体制を行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	情報提供や家族との聞きとりで、必要なサービスを見極めている。新たなサービスは、職員会議にて検討を行い本人・家族の同意を得て利用している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	季節の話をしたり、昔ながらの料理の作り方を利用者様に聞いたりして、いつでも話せる関係づくりをしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の要望を、必要に応じて家族に相談している。また施設内での生活状況を電話にて報告したり、家族の意見を聞いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会は窓越しですが、職員が話しやすいように会話が途切れない様に務めている。携帯や家族からの電話をされたり、地域の子供たちの年賀状に返事を書いたりしてなじみの場所を作っている。	面会は窓越しであるが家族が訪れやすい状況を作りながら、関係性が薄れないよう配慮している。地域の幼稚園、小学校との年賀状のやり取りや地域商店の利用、数年ぶりに再開された祭りでは出店や造り物に感動されている。入居者の生活歴から得意とされていた電子オルガンを持参してもらおう等個別の趣味や特技が発揮できるようしえんしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	テーブル席も孤立しない様に性格を見極めて座ってもらっている。皆さんを交えての会話も毎日弾んで笑顔が絶えないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院にて退居された方の家族が相談しやすい関係を作って、支援している。職員間では、情報を共有している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	それぞれの生活スタイルを尊重しながら、月1回のカンファレンス・申し送りノートの活用で把握に努めている	殆どの入居者が自身の言葉で思いを伝えられており、職員は申し送りノートに書き留めたり、カンファレンスで発言しながら共有し、プランにつなぐようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族・ケアマネジャーからの聞き取りを行いカンファレンスにて、経過の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活の中で出来る事・出来ない事を見極めて、その日の職員で共有し生活してもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の要望に対してや日々の気づきの中で職員とカンファレンスを行っている。本人、家族の要望は出来るだけ添うようにしている。担当職員の気づきをもとに、介護計画を作成している。	本人・家族の意向を尊重し、担当職員の声を反映しながらプランを立案している。家族からの情報や前利用事業所などのケアマネジャーからのアセスメントで状況を確認し、ホームで日々関わる中で初回プランを立てている。ケアカンファレンスで気づきを出し合い評価、見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録の他、申し送りノート・チェック表に記載し職員は情報の共有をしている。またケアカンファレンスにて再度確認している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時のニーズに対して、柔軟に対応できるように、職員間で情報の共有を行っている。法人併設の病院のPTへ相談できる体制である。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事はコロナ過で中止になっている。散歩により地域の方と交流を図っている。何時でも協力できる体制位は取っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は、隣接した法人医療機関が多いが、希望があれば、他病院の受診も可能である。	本人・家族の同意のもと現在は全員が隣接する母体医療機関をかかりつけ医とし、職員の同行による受診支援が行われ、健康状態を家族と共有している。専門医受診は家族の対応としているが、コロナ禍にあり職員が支援しており、家族が医師の説明を聞きたい場合は現地に集合されている。歯科は必要時に職員が同行し、治療や口腔ケアが行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は不在。隣接の病院と連携を取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	定期的に医師や看護師に経過状態を聞いたりして、何時でも相談できる関係を作っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に家族や本人に重度化した場合の文章によって説明・確認している。グループホームでの生活ができない場合は主治医より家族への説明が行なわれる。	入居時に継続した医療が必要となれば、入院の対応となる事を伝えている。重度化された場合、医師を含め話し合いの機会をもち、家族の相談にも応じている。	今後も地域の中でグループホームに出来る入居者の日常生活の支援に、職員のアイデアを生かしながら取り組まれることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	院内勉強会において学んでいる。緊急時は、併設の病院との連携が取れる体制である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人全体で、年2回の夜間・昼を想定し訓練を行っている。地域との方との訓練は、出来ていないが、見守りなどの協力体制はある。居室内はタオル置き災害に備えている。会議により持ち出し物や、非常口の確認をしている。	今年度は9月に夜間想定で、3月に昼想定での避難訓練を実施している。コロナ禍もあり地域の協力を得た訓練には至っていないが、近隣の商店とは避難時の見守りなどに協力が得られていたが、新たな関係性を築きたいとしている。	今後も法人や地域との協力体制を確立しながら、火災や自然災害への対応に取り組まれることが期待される。また、コンセントの埃やホーム周辺に可燃物はないか等、引き続き日常の安全チェックの継続に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	穏やかに声掛けをトイレや部屋へ誘導し排泄の事の失敗を責めるような言葉かけはしないようにしている。着替えやおむつ交換時は入り口の戸を閉めるようにしている。	呼称は苗字や下の名前で対応しているが、殆どの方が下の名が反応が良いようである。トイレへの誘導時の声掛け、着替えやおむつ交換時のプライバシーや尊厳への配慮など職員間で周知に努めている。季節や身体に合った衣類など家族の協力を得ながら取り組んでおり、散髪は2ヶ月に1度としていたが、コロナへの対応から訪問カットが難しい場合は、職員による対応も行われている。入居者の中には乳液など保湿剤を使用される方もあり、不足時は家族へ購入を依頼している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者との会話の機会を多く持ち会話からいろいろの想いを持ち知ることが出来るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者が1日を穏やかに過ごして頂く為、要望に応じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	2ヶ月に1回散髪を行い、季節に応じた服を選んでもらい来ていただく。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	台拭きや湯呑などの下膳をしてもらっている。梅干し作り、干し柿など作って一人一人の力を生かしている。行事の時は、折に入れて食事をして楽しんでいる。	昼・夕食はご飯のみホームで炊き、副菜他は母体病院厨房で調理されたものを温め、提供している。入居者が調理に関わる機会は難しいが、職員が持参した梅で梅干し、干し柿づくりなど出番が用意されている。八朔祭りの当日はホームで綿菓子やたこ焼きを準備し、祭りの雰囲気味わってもらうなど職員の工夫が聞かれた。入居者の湯呑は家族が準備されている。	職員1名が同じものを摂っており、入居者の代弁者として味や量、盛り付け、入居者の発せられた一言などを記録に残し、厨房との連携を図っていくことが必要と思われる。また月1~2回でもホーム内調理(クッキングの日)の日を設け、入居者が楽しみとなる食事提供への取組にも期待したい。入居者から「ラーメンが食べたい！」などの要望も出されているようである。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や栄養バランスは、栄養科と相談しながら行っている。水分補給は、コーヒー、お茶を選んでもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後義歯の洗浄をおこなっている。歩行が可能な方は、自身で行ってもらう。夜間は、義歯を洗浄剤につけて清潔保持している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	布パンツを使用され失禁多くなり、Pトイレを勧めるが本人が嫌がっている方は、本人の意思を大切にカンファレンスにて、対処している。	トイレでの排泄を基本とし、自立の方の継続や必要に応じて声掛けや誘導が行われている。殆どの方がリハビリパンツで過ごされているが、夜間のみオムツに変更される方もおられる。現在ポータブルトイレを使用される方はおられない。排泄用品はホームで準備しているが、面会を兼ねて家族が持ち込まれる場合もあり現状やサイズなどを伝えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェック表下剤使用で調整を行い。毎食時10時・15時・19時水分補給歩行訓練など行う。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	決まっているが拒否がある方は、タイミングをみながら、声掛けをしている。柚湯や菖蒲湯にて楽しんでもらっている。	入浴は週2回午後からの支援を行っている。浴槽にしっかり浸かって欲しいが、身体状況や浴槽が怖いとの要望からシャワー浴が中心の方もおられる。菖蒲や柚子を職員が持参し、季節湯を数日間楽しんでおり、菖蒲を頭に巻くなど昔ながらの慣習に入居者も喜ばれたようである。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	孤立されない様、尊厳を保った声掛けをしている。定期的なシーツ交換布団干し行う。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤証明書は見える所に置き、変更の時は申し送りノート・受診ノートに記載して共有を図る。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴を参照に月ごとの行事、毎日の体操やレクリエーションを行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染予防の為、外出が出来ない状態である。家族から電話してもらったり窓越しの面会をおこなっている。季節の行事として桜の花見、紅葉狩りなど楽しまれ地域の小学生との交流も楽しまれた。	八朔祭りは入居者にとって馴染みの地元イベントであり、ホーム前に腰掛け見物したり、祭りに飾り物や菊祭り見学にも徒歩で出かけている。また、昨秋は車窓ドライブとして紅葉狩りを楽しんでいる。訪問当日は好天に恵まれ、久しぶりの花見に法人車両を使って全員での外出が行われ、車中も入居者の歌声(さくら・ちゅうりっぷ・365歩のマーチなど)で盛り上がったようである。	入居者の殆どが自宅の様子を心配されており、外出許可が出たら帰省し、仏壇まいりを支援したいとしている。また、感染症の状況を見ながら日光浴や花壇、近隣の花の開花などを楽しみたいとしている。取組が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	とられ妄想の方が、居られるので原則としてお金の所持はしていないが、必要であれば、家族了解の上法人で立替・請求する		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙が読めない方は、職員が代読したり、家族や友人の声を聴きたいと要望があれば、電話をかけるようにしている。携帯を自由に掛けている		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節毎に壁の展示物をはりかえ季節を感じて頂いている。トイレ内も不愉快な臭いがしないよう職員そのつど清掃行い清潔を心がけている。不愉快な思いをしない様に利用者にもそのつど、適温かを聞き調整している。	リビング食堂は季節に応じた壁面を掲示している。また室温などは入居者に確認しながら居心地よく過ごせるよう調整を行っている。テーブル席の配置は身体状況や相性なども考慮して決定しており、トラブルが発生しそうな場合は、早めに職員が察知しサポートに入り、雰囲気を壊さないように配慮している。共用空間はコロナ禍にあり特に掃除や換気、必要な消毒に努め、トイレ内は臭気がないよう職員間で確認を徹底している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブル席も孤立しない様に性格を見極めて座ってもらっている。孤立している方には、職員から話題を提供し中に入れるようにしている。テーブルを囲んでの会話や笑い顔が見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族には、入居時なじみの写真や物をもつてきてもらったり、お好きなゲームなど持って来て頂いている。入口には利用者様手作りの表札を貼られ不安なく入室できるようしている。	掃き出し窓の居室はコロナ禍でホーム内に入ることを制限されている家族にとって、窓越しの面会もできる事で安心につながっている。馴染みの椅子やテーブル、置時計、家族から届けられた花鉢が置かれた部屋、枕の後ろにクッションを置き衝撃を和らげる工夫を自らされた部屋など本人にとって安心して過ごせる環境が作られている。また、携帯電話を持ち込み家族との会話を楽しむ方もおられる。施設的な雰囲気にならるよう、居室入り口には本人手作りの表札が掲示されている。	居室の掃除や衣替えは現在職員が中心に行っているが、自ら朝の掃除をされる方もおられるようである。また、入居後も家族が必要なものを尋ねながら持参されている。今後も家族と一緒に居室環境の整備に努めていかれることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	車椅子や歩行車移動時に危険がないよう環境整備をこまめに行い定期的に点検している。		